

第10回 日本がん・生殖医療学会 学術集会  
埼玉, 2020.02.15-16

妊孕性温存治療におけるランダムスタート法の有用性に関する検討

松岡麻理 IVF なんばクリニック

#### 【目的】

がん患者に対する妊孕性温存治療では、原疾患へ影響を与えることなく限られた期間に多くの卵子または胚を確保することが求められる。今回我々は上記目的に導入したランダムスタート（RS）法の有用性を検証した。

#### 【方法】

当院にて2013年1月から2018年8月に妊孕性温存治療として卵子凍結を希望し採卵まで至った乳がん患者40例69周期を対象とした。卵巣刺激方法は、アロマターゼ阻害剤（AI）+hMG/recFSH 57周期、AIのみ7周期、完全自然5周期であった。RS法導入前後で通常（C）群21例29周期、RS群19例40周期の2群に分類し後方視的に比較検討した。

#### 【結果】

平均年齢は $36.0 \pm 4.8$ 歳、全例未婚であり、ホルモン受容体陽性乳がんは33/40例（82.5%）を占めた。

周期あたりの卵巣刺激日数、採卵数、凍結卵子数は両群間で有意差を認めなかった。hMG/recFSH使用量はRS群で有意に多かったが[C: 775 (0-2400)、RS: 1425 (0-7350) IU、 $p < 0.01$ ]、トリガー投与日の血中エストラジオール値には有意差を認めなかった[C: 115.4 (40.8-643.6)、RS: 129.5 (5-511) pg/ml、 $p = 0.14$ ]。

また、RS法導入後も当院初診から採卵までの期間に有意な短縮は認められなかったが、症例あたりの採卵回数[C: 1 (1-4)回、RS: 2 (1-5)回、 $p < 0.01$ ]や卵子凍結数[C: 3 (0-13)、RS: 8 (0-27)個、 $p = 0.01$ ]はRS群にて有意に多かった。

なお本検討中に採卵の合併症により原疾患治療が遅延した症例は認められなかった。

#### 【結論】

本検討より、RS法は原疾患治療までの期間的猶予が限られている妊孕性温存希望患者に有用な方法である可能性が示唆された。今後長期的な原疾患への影響や受精率、妊娠率などさらなる検討が必要である。